

育てられている時代に育つことを学ぶ③

ージェンダーフリー意識の形成と保育教育ー

金田 利子

加賀 恵子

前号においては、乳幼児や高齢者との直接のかかわりを通して中学生が「育っている時代に育つことを学ぶ」姿について報告しました。青年の保育学習は、その視点によって、保育は女性特有の活動であるというような見方（ジェンダーバイヤス）の形成につながるか、それとも子育ては両性で行うものというジェンダーに縛られない見方（ジェンダーフリー）を育てるかの分岐点になってきました。

そこで、今回は、中学三年生の進路決定にどのようなジェンダーバイヤスがかかっているかという事実を自ら調査し、そこから保育教育のあり方を探ろうとしている、中学校の家庭科教師に登場していただきました。そして、ジェンダーフリー意識を形成していくためには、保育教育においても、男女の対等な人間としての生き方とつながる生涯発達への展望を踏まえて展開していくことが大切であるということについて、自身の調査や

実践をもとに、今回のサブテーマへの考察をお願いしました。(以下加賀氏による。)

はじめに

私は、日ごろ、保育の授業の軸足を「幼児を知る」とはもとより「乳幼児との関わりを通して自分を知る」ことにおいています。発達してきた自分自身を知り、自己肯定感を持つことによって、積極的に自分の人生を歩んでいこうとする力を養う場にしたいの思いからです。

私が、このような思いで保育教育や家庭科の授業に取り組み始めた背景には、家庭科とは切っても切れないジェンダー問題があります。今回は、ジェンダー問題を孕んだ中学校の生き方教育と中学校家庭科の保育の学習をからめてお話を進めさせていただきます。

中学校における生き方教育の現状

人生における青年期は、自分の生き

方や人生観を選び取り、職業に従事するための準備をする時期と位置づけられます。中学校教育では、「将来の生き方と進路の適切な選択に関すること」を主に学級活動において行っています。

この中学校における生き方教育は、中学卒業時にほとんどの生徒が高校受験という出来事を経験する現在、克服しなければならぬ問題をいくつか抱えています。

一つには、中学校の進路指導が、生徒一人ひとりの人生全体の展望を必ずしも前提としないで行われていることが挙げられます。この点については「中学校の卒業直後の在籍先確保をほとんど唯一の課題として行われていると言えよう」と指摘する厳しい意見もあります⁽¹⁾。多くの現場の教師は、生き方指導としての進路指導を行いたいと思いつつ、中学三年生の進学間近の時期になると、この指摘の通り、卒業後の在籍先確保を余儀なくされているのです。

また、生徒一人ひとりが人生全体の展望を描こうとする青年期において、自分の意志や適性に寄らない属性に



よって、人生航路が決められていく現状もあります。

「学校は全ての生徒にその社会的出自やその人種や性などの属性に関わらず、平等に能力の開花の機会を与える場である」という一般的な認識が幻想に過ぎないことは、既に教育の属性研究によって明かされてきています。特に、高等学校や大学の女性の進路形成には、学業成績だけでなくジェンダーという第二の進路分化メカニズムの存在が明らかにされています。

私は、二〇〇〇年三月に、静岡県西部の公立中学校三校の中学三年生を対象に「中三生の進路選択と意識に関する調査」を実施しました。この調査において、中三生のライフコース展望も、学業成績とジェンダーによって影響を受けていることが実証されました。

学業成績は、中三生の高等学校卒業後の進学先希望と就きたい職業に影響を与えています。学業成績が高い者ほど、教育と職業の選択の範囲が広く、かつ達成意欲が高いという結果が得られました。

また、性別によっても明らかな違いがありました。

表1 高校卒業後の希望進学先

(%)

	女性	男性
専門・各種学校	34	20
短期大学	16	3
4年制大学	30	49
留学	2	1
その他	18	27

「教育」に関しては、高等学校卒業後進学を希望する者のうち、女子中学生に専門・各種学校や短期大学の希望が多く、男子中学生に四年生大学の希望が多いこと（表1）。「将来つきたい職業」に関しては、女子中学生に専門的職業やサービス業の希望が多く、男子中学生に、技術的専門的職業や機能工・工具、長期の研修や教育を必要とする専門的職業や管理的職業の希望が多いこと（表

表2 将来つきたい職業

(%)

	女性	男性
長期教育や研修が必要な専門的職業（医師、弁護士など）	5	8
技術的職業（エンジニア、プログラマーなど）	5	25
専門的職業（教員、看護師・看護婦、保育士など）	43	9
管理的職業	1	7
事務・サービスの職業	30	17
技能員・工員	0	11
その他	16	23

表3 結婚したい時期

(%)

	女性	男性
できるだけ早く結婚したい	32	15
結婚適齢期までには結婚したい	25	33
結婚したいが早くなくてよい	15	23
あまり結婚したいとは思わない	12	12
わからない	16	17

2。「結婚」に関しては、女子中学生に早く結婚したい傾向が、男子中学生に結婚は遅くてよいという意識が見られること（表3）。「将来の生活スタイル」では、女子

中学生は「家庭的自己実現」を望み、男子中学生は「社会的自己実現」を望んでいること（表4・5）などです。

中学三年生のライフコース展望は、育った社会状況に影響され、その時代を生きる先達のライフコースを映し出しています。性によるライフコース展望の違いは、現代の女性と男性の違いといってよく、社会は自らを再生産しているという、再生産理論を裏付ける結果だといえます。

では、中学校教育において、真に、属性に寄らない生徒一人ひとりの意思や適性による人生を描くため

(%)

表4 社会的に高い地位についている

	女性	男性
とてもあてはまる	2	8
ややあてはまる	16	18
あまりあてはまらない	65	57
まったくあてはまらない	18	16

の具体的な生き方指導の展開をどうすればよいのでしょうか。

私は、家庭科における保育教育がその一翼を担えると考えています。

(%)

表5 幸福な家庭生活を送っている

	女性	男性
とてもあてはまる	38	26
ややあてはまる	50	51
あまりあてはまらない	11	19
まったくあてはまらない	1	4

家族関係を中心にすえた家庭建設の教育という理念を掲げて出発したものののです。

しかし、家庭科は順調な発展を見せませんでした。その新しい理念は、なかなか理解と支持を得られないばかりか、戦前の家事・裁縫科と同一視されがちで、しばし

ジェンダーと家庭科の歴史

なぜ、保育学習が具体的な生き方教育の場になるかの前に、少し遠回りになりますが、ジェンダーと家庭科の歴史についてふれたいと思います。

家庭科はその扱う内容から、今もって戦前の家事・裁縫科につなげてイメージされることがあります。しかし、家庭科は、戦後の教育民主化過程において戦前の良妻賢母教育を否定し、新しい理念を持った全く新しい教科として生まれました。男女共学で、

ば不要論さえ唱えられました。加えて、産業優先の教育政策の中、企業が要求するところの人づくりにおいて女子教育に求められたものは、家族責任強化と低賃金労働力の供給源たる女性の育成でした。これらの要求を満たす上で、「男は仕事、女は家庭を守るべき」とする男女分業論が唱えられ、「女子のための家庭科」「女子のみ必修の家庭科」の必要性が増加することになりました。そのため、家庭科の教育内容は、家庭科成立当初の理念「男女共学で家族関係を中心にすえた家庭建設のための教育」から大きくそれていきました。

最も大きい変化としては、一九五八（昭和二三）年における技術・家庭科の成立が挙げられます。家庭科は、衣食住教材を中心とした技術教育の視点から「女子のための家庭科」「女子のみ必修の家庭科」として再構成されたのです。

その後一九七五年の国際婦人年以降、男女の役割についての固定化された概念の撤廃とそれを推進するための教育を求める世界の動きに後押しされる形で、一九八九

（平成元）年に告示された学習指導要領において、家庭科は小学校から高等学校までの学校段階で、普通教育としての共学・必修教科となったのです。

以上述べてきたように、ジェンダーは、家庭科の成立経緯から現在にいたるまで避けて通ることのできない課題なのです。

保育学習における

「ジェンダーバイアスの再生産」という落とし穴

現行学習指導要領における中学校家庭科の保育領域は、「幼児の遊び、食物及び被服に関する学習を通して、その心身の発達に応じた生活について理解させ、幼児に対する関心を高める。」を目標にしています。この目標の具現化に向け、私もさまざまな実践を積み重ねてきました。ただ、残念なことに教師の思いや意図とは裏腹に、授業後の生徒の意識に尚「育児Ⅱ母親」が残っている反省すべき授業実践もありました。

以前に「人間の発達」を取り上げた授業では、胎児期

から乳幼児期の成長を追いました。その中で生徒個々が抱いた間に対し、家族へのインタビューや書物などを利用して調べ学習を展開しました。授業者としては、「将来親になってもならなくても、胎児期から乳幼児期の成長を扱うことで、自分の成長を重ねて振り返り、自分を成長させると共に、次世代を育てることの大切さについて学んで欲しい」との願いを込めた実践でした。

授業後の感想には、自分の成長を振り返りつつ、命のつながりを意識した感想も多く寄せられました。

「自分は、今まで一人で生きてきたなんて言っているのは、親の努力や愛情を知らない人だなと思う、今ここに自分がいることはいきなり生まれたのではなく代々続いているのである。」「命…私が今ここにすることはすごく不思議なこと。保育の授業をやって、本当に両親が私のためにいろいろしてくれたんだなあと思った。」

ところが、一方で、保育学習を終えた後に愕然とするような感想も寄せられました。

「女の人は出産の時、とても大変な思いをするそうで

す。僕は、男に生まれてよかったと思いました。」

「もし、私が母親になったとして、やっぱり子どもはいい子に育って欲しい。そのためには、母親が肝心なわけで、授業でやったいろんなことを、もっともっと勉強して、子どもを育てていかなければならない。」

実は、この保育教育を行う前に生徒の意識調査を行っています。その結果に寄れば、保育を学習することの意義は「将来役に立つのでよい」が圧倒的でした（表6）。先の「男に生まれてよかった…」「母親が肝心…」

表6 家庭科で保育を学ぶことに対する興味（複数解答）（%）

将来役に立つのでよい	56
将来はわからないが、興味はある	37
自分が成長過程をみたいので興味がある	16
子どもは嫌いだから、興味がわからない	4
男は育児に関係ないので、必要ない	2
その他	5



との感想を持った生徒にとっては、この「将来役に立つ」の将来は、従来の性別役割分業意識に基づく将来であったといえましょう。この保育学習は、結果的にジェンダーバイヤスの再生産を行うことになってしまったのです。

以上のように、家庭科における保育教育が、ジェンダーバイヤスを再生産してしまう危険性を孕んでいることに自覚的であること、そして、このことを意識した授業展開が必要だといえるでしょう。

保育教育における生き方教育とは

最後に、今まで述べてきたことをもとに、「育てられている時代に育てることを学ぶ」保育教育のあり方について提言したいと思います。

保育の学習を、乳幼児を介した自分づくりの教育と位置づけた「生育史」の授業は、多くの家庭科教育関係者が実践するところとなりました。自分の幼い頃をたどる中で、幼児に対する理

解を深めながら、同時に自分自身（人間）の身体的自立・精神的自立について考える内容となっています。授業後の生徒の感想には、「自分を客観的にみられるようになった」という記述もたくさん報告されています。

但し、先述したようにジェンダーに縛られたライフコース展望を描いている中学生の実態を踏まえ、自分の将来を見通す保育学習の展開が必要です。「生育史」の授業が、人間発達の視点を欠き、自分自身のこれからの発達を扱わず、将来を見通すことのできる保育学習になっていない点が残念です。「自分を客観的に見る」と」には、「育てられている自分を客観的に見る」とばかりでなく「育つていく自分を客観的に見る」とも含むべきでしょう。保育について学びつつ職業生活も含めて壮年期の自分の将来像を思い描くことが、自分自身のジェンダーバイヤスについて見つめたり、実際の生活の中でのジェンダー関係を見直したりするよい機会になります。自分自身のこれからの発達を扱うことは「人間は発達する。自分も発達してきた。これから、発達して

いく」という学業成績やジェンダーに縛られることのない自己肯定観を育てることにつながると考えます。

おわりに

中学校の教師として生徒を見ると、学業成績とジェンダーのクロスのはざまで漠然とした不安を持ちつつ、中にはライフコース分化の流れに流されていることの実感のないまま高等学校に進学していく子どもたちの存在に目を向けざるを得ません。こうした子どもたちに、自己を肯定し、目標を見つけ、自分の持っている能力を活用していく力を育てる必要性を感じます。

これに対する手だてとして、「中学校家庭科」における保育教育の実践は、有効であると考えます。来年度から完全実施となる新学習指導要領では、幼児の発達や家族や家族関係の学習の導入として、自分の成長を振り返ることが位置づけられています。中学生という育てられている時代に、自分とは異なる世代（さらに性や発達）の人々と関わりながら、ジェンダーに縛られることのない

い・こ・れ・か・ら・の・人・生・を・見・通・し・た・自・分・づ・く・り・の・教・育・（・保・育・の・教・育・）をすすめたいと思います。（以上加賀氏）

今回の加賀氏の報告は、保育教育は、ジェンダーフリー教育とあわせて進めていかないと、学べば学ぶほどジェンダーバイアスの深みにはまっていくという恐れのあることを示唆しています。そして、自身の苦い体験をもとに今後の課題としてジェンダーフリー教育と保育教育を切り結んだ実践の創造を挙げておられます。

確かに「母性神話」などの課題についての学習は、ジェンダーフリー意識の形成と重ねてなされてきていますが、「子どもの発達と保育」をいうような具体的ななかかわりを主とした内容についてはジェンダーフリーと結合した実践の積み上げはまだ少ないように思われます。

そしてこの問題は、青年期を対象とした保育教育においてのみならず、本連載の第一回で述べたような乳幼児期を対象とした保育教育（生活主体形成の教育）においても必要不可欠なことです。たとえば、保育室で「やつ

「ぱり男の子は強い」などと不用意に言っていることはな
いか、正座をお母さん座り、あぐらをお父さん座りなど
といていないかなどが見直しが必要なのではないで
しょうか。しかし、その研究は緒についたばかりのよう
に思われます。保育関係の文献に当たってみても、男性
保育者の必要性について⁽²⁾は、その角度から探求されてき
ていますが、実践的な検討においては森隆子氏の一連の
研究が貴重な存在になっているのみという状況にありま
す。ちなみに私どもの研究室でも最近観察による研究を⁽¹⁾
進めてきているところです。

こうした視点においても、乳幼児期から青年期までの
保育教育のつながりの大切さがうかがわれるのではない
でしょうか。

金田（静岡大学）

加賀（静岡県浜北市立北部中学校）

参考文献

- 1 藤田晃之「ハイスクールにおけるキャリア選択援助
カリキュラムの特質と課題」現代アメリカ教育研究会
編『カリキュラム開発をめざすアメリカの挑戦』九三、
一一五ページ 教育開発研究所 一九九八年 片田江
綾子「アメリカにおけるキャリアに関する教育―家庭
教科書分析―」大学家庭科教育研究会第一一七回例
会（一九九九年一〇月二四日）の研究報告資料より重
引。
- 2 木下比呂美「三歳未満児の発達と男性保育者」金
田・諏訪・土方編著『保育の質の探究』一一三―一二二
ページ ミネルヴァ書房 二〇〇〇年
- 3 森隆子他「保育のなかのジェンダーに関する一考
察（1～6）」日本保育学会大会発表論文集 第四十九
回（五十四回 一九九六―二〇〇一年）
- 4 清水絵美・金田利子「性別認識家庭におけるジェ
ンダーの影響と保育（1）（2）」日本家政学会発表要旨
集第五十二、五十三回大会、二〇〇〇、二〇〇一年